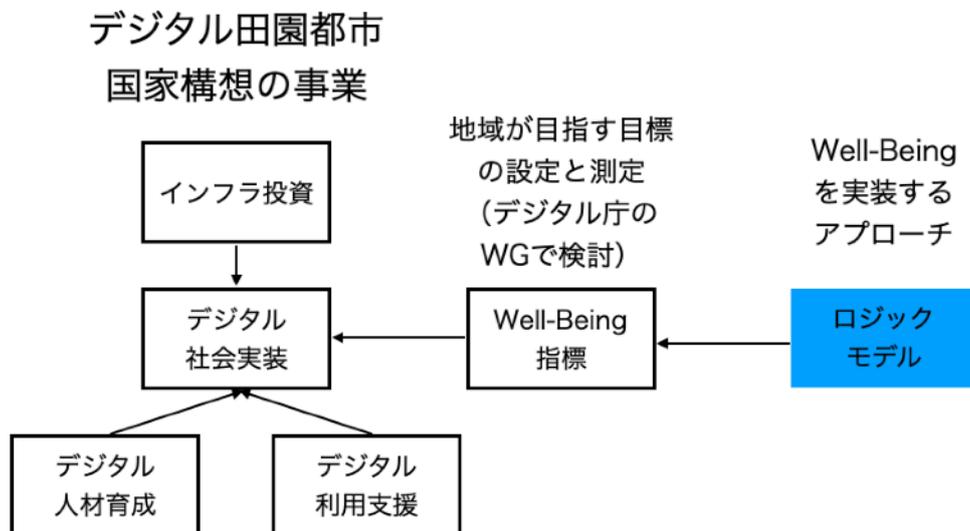


デジタル田園都市国家構想の実現に向けて： Well-Being指標とロジックモデルについて

株式会社New Stories 太田直樹

デジタル田園都市国家構想は、現時点で4つの政策で構成されている。それぞれ、今後、一層の具体化が求められるが、この構想が地域で価値を創造する鍵となるのは、Well-Being指標である。そして、Well-Being指標を地域で設計するためには、ロジックモデルを活用するとよい。両者は、行政や民間セクターでまだ十分に普及していないので、要諦を述べたい。



これまでの事業が「実証」で終わり「実装」まで至らなかった理由は、突き詰めると「手段（デジタル化）の目的化」と言える。例えば、自動運転が目的になると、交通によって地域の経済や暮らしがどう変わるのかが見えなくなる。実際、多くのIT化やデジタル化の事業は、結果として地域がどう変わったのかデータが取られていない。

また、これからの事業において、目標は「効率化」や「生産性向上」のみでは求心力が不十分である。海外でスマートシティ事業が失敗している理由は、ここにある¹。

Well-Being指標は、デジタル田園都市国家構想を意義のあるものにする。

¹ データ戦略タスクフォース（第7回）北野宏明氏の発表資料を参照

1. Well-Beingについて知っておきたいこと

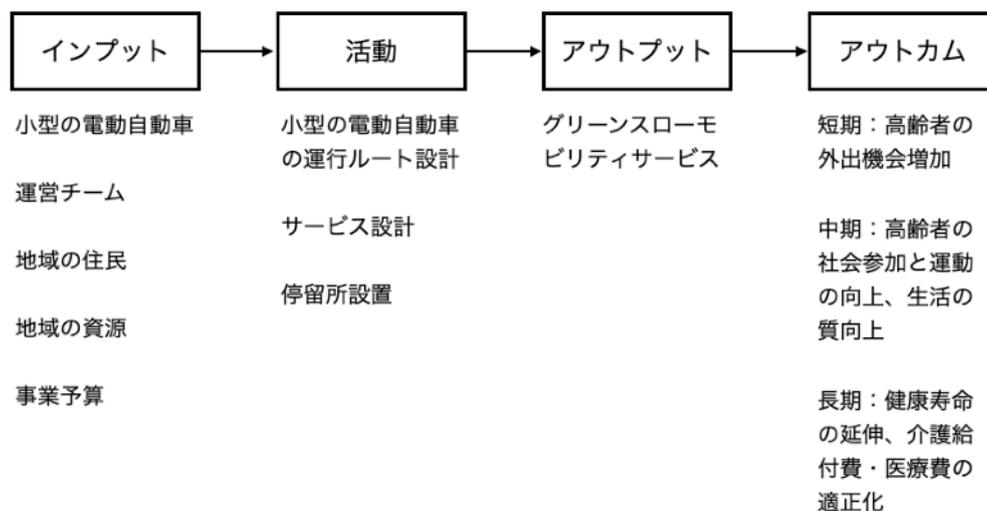
Well-Beingという言葉は新しいものではないが、行政やビジネスにおける活用の歴史は浅い。押さえておきたいポイントは2つある。

- ・ 2000年頃から世界中で研究が加速した。論文の数は5年で2倍のペースで増え、2016年には全論文の500本に1本はWell-Beingを扱っている²。
- ・ 研究の結果として、Well-Beingの因子（幸せを感じる理由）は、多様であることが分かってきた。さらに、アンケート等の主観データだけでなく、行動データ等の客観データから因子の変化を捉えることが可能となった。

以上のように「幸せが科学できる」ようになったのが最近の変化であり、さらに、サービスとして設計可能な段階に入っている。スローガンとして「幸せ」を語る以上のことが政策として可能になったと言える。

2. ロジックモデルでWell-Beingを設計する

デジタル庁ではWell-Being指標を検討しており、デジタル社会実装のTYPE2・3事業の地域から導入される予定だが、指標だけでは、いわゆるPDCAを回して、事業を運営することはできない。



上記はある地域のグリーンスローモビリティ事業のロジックモデルである。サービスによって、短期的には高齢者の外出機会が増え、中期的に社会参加や運動の向上、生活の質向上につながり、長期には健康寿命の延伸や介護給付費・医療費の適正化につながるについて、予算等のインプット、事業活動、事業が提供するアウトプット、そして成果について設計し、結果を測定し、見直すことができる。

² Scopusから集計した結果

3. ロジックモデルから生まれる大きな幹

上述のロジックモデルは、Well-Being指標を実装するために有用であるが、設計と運用については専門家が参加し、事業に関わる行政や民間のメンバーも、関連の知識や経験が必要となる。しかし、ロジックモデルは、専門家や事業推進チームだけのものではない。

ロジックモデルについての知見が蓄積されると、大きな幹が見えてくる。

例えば、町がWalkable（歩くことができる）になると幸福度が増すことが、国内外のまちづくりで注目されている。また、生物多様性が幸福度に寄与することについても研究が進んでいる。こうした因果関係がロジックモデルには含まれており、デジタル田園都市の事業を、ロジックモデルを活用して進めていくことで、Walkable CityやBiodiver-Cities³などの大きな概念を、具体的なサービスと紐づけた形で、地域住民や事業の参加者と共有することができる。

デジタル社会実装を1000団体で実施していくことと並行して、事業者がロジックモデルを設計・運用できるノウハウを普及させ、さらに地域ならではの価値を生み出す大きな幹が見出されることを期待したい。

以上

³ World Economic Forumによって2022年1月に発表されたプロジェクト。人間と自然の関係を再設計することで、地域に新たな価値を生み出すことを意図